

発行所
大阪市阿倍野区阪南町
大阪府立
阿倍野高等学校新聞部
編集兼発行人
江藤美保子

帝塚山短大(被) 滝川裕子(食)
 圓野祥子(文芸) 松田貞代 大手
 前短大(被) 滝川裕子 武庫川女
 子大(教) 佐々木章子 同志社一
 次(法) 阿知波良雄

きよ
う
巢立つ
三六二名



校長 赤間 一夫

技の場として体育館の建設。普通教室・食堂の増設などを、いよいよ完了するにたりました。卒業生諸君が、客々としてこれらの恵まれた環境にあり、活き過は、色とりどりでありました。うが、折にふれて、この三方案を想いおこしていただき「おおしく」「なぐましく」「開け行く人生を、生き抜いていただくことを意願して、最後の「はなむけのご宴」をいたします。

何となく前途が暗くて楽しめなかつたのです。そこで私は、この方針に間違ひがあるのではないかと深く反省しました。その結果、ようやく気づかせるにもつたことには私はたゞ一身一家というような部分にのみとらわれて全体を害れてゐたのです。一言で申せば、神の御心を知らなかつたのです。全体のために奉仕することを忘れては、いかに部分が榮えても、け

二、いかなる難關も必ず通り抜ける。

一、真実の願いは必ず叶う。

以上三つの信念を得るのに三十年かゝつたのが、私のいつわらない体験です。

皆様は、今や聲する母校と恩師に別れて世の荒波にまどされようとしていますが、これからの長い生涯には、楽しいことも苦しいことも起ります。しかし、苦しみ必ずしも苦難ではなかり、楽しむの糧となり得ます。

人生は、神の

PTA会長 桃谷順一

生の皆様に贈る

府体育功勞賞
金沢勝成
西田昌子

府体育功勞賞
金沢勝成
西田昌子

一〇八

又外國書を以て其の

と比較して、速達大学志願者が、薬科・甲南大学八、滋賀。

経済大学七、中央・大谷女子

いよいよ返上できぬ眠む

いよいよ返上できぬ眠む

でも、功、之、執、行、

でもよく重いた幸行音

五十一

号にも発表したが、昭

次の通り。

帝産才トKK中家
島屋上田福次郎、西

一、應予以多行

自治会文化綜合雑誌
六号は、薈々その編集

2. 设计并实现一个基于深度学习的图像分类模型，能够识别并分类输入图像中的物体类别。

果したようであるが総

華行喜

議会の汚名を返上でき
ば残念である。また

▽いよいよ今日は卒業

三年生のミナサマ、お
さいます。▼光陰矢の
に月日の立つのは早

የግልጽ ምርጫ ማድረግ

のはては投げ捨ててしまふのまぎわになつてはじつじつのかたかならう。

予定より早く完成▼

もだいぶん正確にな
れにしても三年の方
。毎年三年は新築物

流して？ 毒をくはさる

送部もこれで二安心、
ここに重い道具を持つて

THE UNIVERSITY OF CHICAGO

心とはありがたいもの
の御父兄方可愛いわが

のは非常に残念で仕方がない。それを勝る図書館あり、また設備の整つた体育館もある。かくのごとくしてまた今更ながら母校に限りなき愛慕の念を感ずるのである。

しかし、僕はこの高校生活で磨かれた学識経験を遺憾なく發揮し、社会に有用な人材となり、本校のある伝統を傷つける事なく前途に各々自己の才幹を余すところなく、發揮し極まるまで高校生活を送られんことを切望してやまない。

つて下さう。

はじめて学窓を離れた頃

福井 淳造

昔を語る年でもないが、想いまたに懐いていた私達は果に
出ずと初めて学窓を離れた頃、戦争のさなかであつた。戦争
に押されたのは軍隊であつた。戦争のさなかであつた。戦争
のさなかであつた。戦争のさなかであつた。戦争のさなかであつた。

卒業生に贈る

ふたたび春がめぐつて来て新しい
学窓を出て行く人達を送る頃
ふたたび春がめぐつて来て新しい
学窓を出て行く人達を送る頃
ふたたび春がめぐつて来て新しい
学窓を出て行く人達を送る頃

小さい倫理を大切に

たけうち とおる

淡い感情をそよと「おれは」
「おれは」が言葉から流れ出
るのを聞く。手紙に
かいた生徒の四つが、それぞ
れのおれに、それぞ
れのおれに、それぞ

眞理への探求に進め

久岡 一美

三年間の生活は夢のように去つ
て今、旧時代の権威への懐疑
を胸に抱いたとき、新しい科学
を胸に抱いたとき、新しい科学
を胸に抱いたとき、新しい科学

ある話

陶山 登

林房雄の「虚無への郷愁」の中
の「おれは」が言葉から流れ出
るのを聞く。手紙に
かいた生徒の四つが、それぞ
れのおれに、それぞ

健康に注意せよ

小川 旦

今日は待望の卒業式。ついでに
「健康に注意せよ」という
御言葉が、私達を時代卒業
生として、私達を時代卒業
生として、私達を時代卒業

有能な人は常に学ぶ人

谷本 澄子 (二ノ五)

ありふれた思ひ出を心に
「有能な人は常に学ぶ人」
「有能な人は常に学ぶ人」
「有能な人は常に学ぶ人」

特集 卒業生に贈る

つて指導してくださった先生方、
その栄えある卒業をお祝いして
贈る言葉、そしてまた卒業生が
これら卒業生がこれら卒業生が

冬来りなば春遠からじ

白川 正

卒業生としての一年の時を
「冬来りなば春遠からじ」
「冬来りなば春遠からじ」
「冬来りなば春遠からじ」

明日を期待して

西浦 精一 (二ノ一)

卒業生としての一年の時を
「明日を期待して」
「明日を期待して」
「明日を期待して」

豊かな心の余裕を

白戸 タイ子 (二ノ三)

御卒業おめでとうございます。
「豊かな心の余裕を」
「豊かな心の余裕を」
「豊かな心の余裕を」

在校生に贈る

堀川 紀美子 (三ノ一)

「美しい人生を築かん」
「美しい人生を築かん」
「美しい人生を築かん」

勉学を怠るな

前田 善啓 (三ノ三)

治学活動をしなさいと云ふこと
「勉学を怠るな」
「勉学を怠るな」
「勉学を怠るな」

眞の高校生活を味わえ

岩田 妙子 (三ノ七)

夢の間に過ぎてしまった三年
「眞の高校生活を味わえ」
「眞の高校生活を味わえ」
「眞の高校生活を味わえ」

理想の学園建設に努力せよ

山崎 秀夫 (三ノ二)

理想の学園建設に努力せよ
「理想の学園建設に努力せよ」
「理想の学園建設に努力せよ」
「理想の学園建設に努力せよ」

カツト 奥田淳二

希望にみちた春の訪れ、いま学窓を去られる卒業生の皆様おめでとうございませす。この佳き日を記念して、ここに学芸欄を特策し、御多忙中の貴重な時間を割いて御寄稿下さった先生方には厚く御礼申し上げます。

新にされた“美”の認識
ル・ブル展回想

政
本
博

大騒ぎをした後は大喧嘩うつろいながら残ります。しかし今度のルール展げは、あとにすぎなかりしいのを残しました。訪れた人々は驚き期以上に魂をゆさぶられ数えられたからです。

第一目に訪れた時、私は言葉まいました。しかし、会期が終りましたから、ルール所蔵でないものに近づいて、もう一度見たくてたまわなくなり、雨もよのち、長蛇の列に加わって、作品と話をじにきました。感じたことをし述べてみます。

先づ、作品の性格については、うに求められていたわけです。

出ないほど感傷を覚えました。今世紀の向もあつたようです。総じて中世の筆は他の筆ほど二
 過去年の歴史の障に直接触れ 今世紀の筆は、ルーブル美術館の
 十六の筆を時間の限りにす すぐりさるためてはな
 した。果は二世紀に随つて、翌 フランスにおりる美の伝統をな
 の安息日をその回想に献けてし 的に理解させることを目ざしてい
 断片以外は作品の移動はむづかし であるため、摩滅となつたもの
 中世の筆は教会建築中心 である。中世の筆は教会建築中心

六
石川信子

ビタミンB₂の分子の一部分であるリボースを合成しようとして、カニ殻を相手に立ち実験室で煮込んで焼く。すると、ふと六六という数のり、ビタミンB₂、即ちリボフラビンと臨床的效果を比べると、リボースをテラビノースに置き換えただけで、矢張りテラボフラビンは十分効きものである。尤もテラビノースかリボースを合成する事が出来るから、手数を抑けてもリボースにしてからテラビンと結合すれば良いわけである。

兎に角、五個ではない特に六個の炭素原子の鎖をつないだものが

ている。一体、炭素原子が結合するのには幾数とあれ何個でもよい筈であるのに、特に六個結合したものが我々の生活、習慣が深いのは何故か。

これに關聯して一時間を六十分、一分を六十秒に、そして内閣を三十分、一分を六十秒に分けて、一分を六十秒に分けては、ビタミッドを建設しオベバリヌクによつて時間と空間を測つ

リボースはブドウ糖と同様にその分子中に六個の炭素原子をもつた糖、所謂六炭糖であるが、カニ殻のキチン質を構成しているグルコサミンも、ブドウ糖に非常によく似た物質で、六個の炭素原子をもつてゐる。唯異なる点は、ブドウ糖の第二炭素についている水酸基がアミノ基に代つてゐるだけである。このグルコサミンからはアラビノースという五炭糖が出来る。そこでアラビノースにフラビンを結合させて、アラボフラビンを作ると、

身体メタボリズムに關与するという事である。またわれわれは六炭糖であるブドウ糖をエネルギーに來ても、藻や草に含まれる五炭糖を營養にすることが出来ないのも偶然かも知れないが不思議である。驅出剤のヘキシルレゾルシンもレゾルシンに炭素原子六個の鎖を付けてゐる。B、H、Cも炭素、水素、塩素の各原子がそれぞれ六個つゝ結合してゐる。それとベンゼンや石炭酸などの系統の色々の物質も炭素原子六個が環状になつた古代エジプト人の遺物かも知れないが、その人々は故に六十に分割したか、半ダースが六個、何れも偶然にしても不思議な因縁である。こんなとりとめもない六に關する遐想をしてゐる間に、あの

た古代エジプト人の遺物かも知れないが、その人々は故に六十に分割したか、半ダースが六個、何れも偶然にしても不思議な因縁である。こんなとりとめもない六に關する遐想をしてゐる間に、あの

（筆者は理科教師）

そをいふと、その断片を立体構成して雲々とした想像彫刻の原大写真裏でも数多く添えられていたら、或いは、印象をもつと高めたかも知れませんが、中世人の美意識が大地に下垂した天国を指向するものであったことを実感させる工夫がいま少し充分でなかったことは残念でした。しかし、大原美術館長の中原総一郎氏は感想としていつておられたように、フランス芸術の中核にはこの中世芸術が位置しています。このことはフランスに限らずヨーロッパ芸術全般についてあてはまります。ある人がしじみみといいました。「キリスト教を充分理解していないために、ヨーロッパの芸術や他の文化を深く理解しようとしても、感ずるところまでくると壁に突き当たってしまう」確かに宗教は文化の現象であると同時に、文化の魂です。フランスについてみると、中世ゴシック芸術を代表するカサノヴァ邸の山荘の装飾に

「醫師明かすつかつかがえましたが、以後
あつたところにかゝつて、痊愈
する機会に催されることが、事実
上、次の機会に催されることが、事実
上、すべてを望む方が無理だ
と、壓不作品も見る側の心理的
な努力から考へて二百点が限度で
思へば、フランスといへば度
巴りの歡樂を想像する日本の一
章の錯覺と同様に、フランス美
術について印象派以後の近代美術
思想、日本の美術愛好家の偏見に
対し、強い矯正の機会となつたに
ちがひありません。そしてこれば
同時に、日本の伝統芸術への開眼
ともなつていさう喜ばしいこと
です。日本の現代美術にしばしば
見出される無國籍な性格は克服さ
れねばならないからです。」

美の歴史を理解するには歴史の
常識、鑑賞力が必要ですが、美
のものを味わうにはそれとは必ず
しも不可欠ではありません。素直
な心だけで充分です。歴史につい
て詳しくは知らないで訪れた人も
充分鑑みられたにちがひありませ
ん。それにしても、会場で囁子を
けたまま眺めている人々、特に
学生が少なからずあつたのは残念

した。偉大な芸術の前では臆縮を
するものがそれを創造した人に対する
驚きの当然の報酬です。何となく
あれ、創造するとは並大抵で
ないのです。もちろん諸君の間の
それはそういう不心得なかつたと
します。

びつくりする程に出場の場勢は
へんな盛況でした。人それぞれ
特に必ひかれた作品を記念する
めてでした。みてみると、甘い
直な絵が飛ぶように売れ行き
す。それでよいと思惟しました。

近の展覧会には素直な美しさが
しいからです。美しというも
は、理屈が立派だから美しいの
はなく、理屈に左右されず美し
のだからという単純な事実を、尚を
う画家たちは忘れていきます。素
な作品をそれによさむい装飾
で味をせる今回の展覧会が、日
にいつもみられるあなたが、購買
車のような確然たるひびきに
れた展覧会よりは、はかばかに大
にアピールしたのも無味はあり
せん。

それにしても、絵計百十人、人
はよくも訪れたものだと感じし

最後は、もう一つ見るべきものもありました。それは美しいものでも、偉大芸術家や学者や著名者の顔が、それぞれ独自に輝きをなべているのが偶然ではないことに察せました。そういう人たちは、生きたからです。
 またまた感ぜたことはあります。しかし、予定の紙数となりました。筆をおきたらと思います。
 【筆者は社会科教師】

を放ち、臍部は蒼黒くふくれ、完のて、ありありと死相を呈してとつたが病れた。同輩に茶判子といひいた事がないので少し不愉快だが、看護婦達の断片的な話から推察するところ、もう随分長い間病んで居るらしい。一人も面会し来ない。男傭人に来るのではない。今の女余翁は全くなかつた。

父をへえた軍隊は傍の看護婦を助けるのみならず、「輸血出来たら助けてあげよう」といふやうな言ひも聞かない。」とつづいて

事實その頃はもう敗戦の前で出張で、内科患者に輸血したことがあつた。

さうして女余翁は全くなかつた。

である。

の夜半 山田は不図眠が醒め何處かでギーパーンと義足で音がなすかに耳に聞こえて來ると驚かされてならない。切りは眞夜だとしてならない。

なまじり今何時頃かを全くわからない。しかしんと更けわたつた気がするとどうも真夜中の事ではない。この夜更けに、義足など下を歩いているのだとか。しんと静まり返つた病院後というものは随分と物寂しいのである。山田は何物かにならぬ。

したのである。一週間後のあ
「さうだ、神無月には、
民は、信氣を終る條々と去
くや」を防衛隊より兎つ
がら、今日も一日生き延びた
もの知らずに安眠の目を撫で
ていたのである。

の夜から不眠譚な事が続いて
た。毎晩真夜中にならずさま
の事なので山田はずいずい味
なつて、三日目の晩までま
なつて、三日月の晩にたま
にぞり隣のベッドに睡つてい
る中村を揺り起こして、「い
どした事か、中村のベツ
ト脱げる様なのさ。死を
に擦りつけて然奴ねえ、皆のあ
村が、この深夜何処へ何にか
たのであるか。山田は怖し
好奇心に駆られて顔を出て

術士
し
を
と
の
何
血
囉
と
来
と
つ
の
来
か
見
た
た
に
に
つ
手
被
又
バ
か

の世の事も思えない事だ。はなはたなか、ものを見ても出は危うく卒倒しそうになつてを幸ひしてとて、後はもう夢中をして自分のバンドリ着いたがもわかない位だ。早鐘の様に鳴る心臓を胸に押え、頭を毛布をすつぽりと、こたわなを纏えていると、例の不気味な養足の音がギーンと近づいて来るではない。養足のは靴底の前まで来る

創作
廣島陸軍病院
(世にも奇怪な物語)

中原隆雄

太平洋戦争も敗北しようやく濃く
なつて来た昭和二十年二月、山田
陣陽助等二ノギニヤ戦線より送還
され、白衣の勇士を満載して、最
後の目的地揚子江船高砂丸（二万ト
ン）を昇る。字のマークもくつきりと
鮮明に海面にその巨体を横たえた。
生きき再び進むその巨体もあるまい
と想はれた故國の土の上に立つて
歩きかゝつて来た過ぎた二十七年

中原 原隊所在地の広鹿原(廣鹿原)に転
されて行つた。広鹿原はかつての
春秋時代を過ぎた後、出羽遊撃軍
の後、榮養失調、悪性熱帶マラ
リヤ熱の重症患者とて一個空に取
られたが、其地には一人の先客
があつた。その先客はすつ汚い毛
を頭にかつ、そば被て寝ては
ゐるので、どんな人物かと疑は

隆雄

「王様のお身は、昨夜の不慮な
防壁に退避のため不自由
でしたとたん、何なく露
したとたん、口あたりに何やと妖し
い中村の顔を
一瞬何故とも知れずそ
せき立てる看護婦に拒
ひ出されてしまったのだ
う」

見
す
て
下
が
行
く

薄明かるい防壁の光りでしてみると、誰か藉をつけた不気味な音を立てながら廊下歩いて行くではないか。後姿うも中村には。奇怪な彼の「不気味な衝動」に田は一瞬に立すくんだ。薄明を生ま

のつづのめには思は倒は

「お、山田の主人が来なう。さうして附屬
の工員も来るやうに……」と云つた。
「さうだ。さういふのは、山田のベツトま
でに上つて来たかと思つと、山田
がみつゝいていた毛布を巻をら
りあげ、血糊のしたたる口許
からニタリ不気味な笑みを濕
々ならしめた。」
「山田。見たか？」とあ
つちくさるやうな声を出したかと
なく、そのまま其処へバツタリ
してしまつた。可哀なるに中村
君は獨りたゞ居てそのさま死

はもう遠い昔の悪い夢のように
をさへならなかつた。なつかしい
國日本。南十字星の光り輝も
、流れよる種子の笑を胸にあて
は夢にまで憶れた故国日本。
田はとうして再び故国の空を仰
見ると、只もう何がうれしいも
がくつと胸にこみ上げて来、
旧の涙が止め、堅く頬を伝

分らなかつたが、何んとなく辺に
に屏風が障ふているうちに思
れ、ぞつとする程に「氣味悪く
だ。枕ものの柄札をもぞつと返
いて見ると、中村上壽兵（腹
）としてあつた。

「それは、文化化していたが、不忠義
として京都大層は未だこれまで
度も度強張っていないかつた。が
空襲のある事は火を見るより
明かである。原子爆弾な正が有
る。いつかは夢にも知りなかつた哀れ
大仏屯田はバケツ溝ハレリに
可哀なものであったのである。」

「月も末の或る朝定期診断があ
る。同室の中村の病状が急速
に悪化する事は、素人の山田
大仏にはつきり判る程であつた。」

「でも、彼のお許しにぎり付
いたものは血が臓とでもいつ
のよ様な気がしてならな
「そんな馬鹿な」と否定す
いから不吉な感じが頭をまた
来、山田は思ひ出す。胸が悪
つて来て、吐気を催す程だ

お田さきあたりにじ

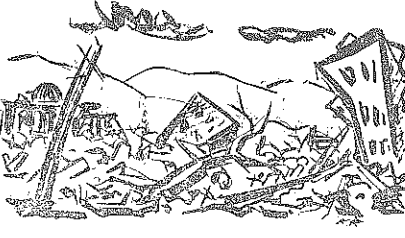
[illegible]

れが丁度まる三日目、園子には広島陸軍病院の丁度真上に入院患者三千名は一瞬に胃腸化してしまつた。時に一千八百八日午前十一時である。(主わり)

『善隣記』本編の主人公山田辰吉しも八日の朝一番列車山田縣の奥地の分院に疎開したので、悠うく生命拾いを探しながらお健在である。

(筆者は数学科教諭)

カット川手圭介



の奥に、
で、
なお、
著は
か